

う50近いですが、HIVに関しては十分すぎるほどの知識はあります。けれどもリスクマネジメント…自分自身のリスクマネジメントというもので、コントロールしてしまう、という部分があると思いますね。さっき言ったその、生でフェラチオしてしまうっていうのもね。そのあたりは、当然、パーセンテージにはならないけれど感染する危険はある。特に不特定、知らない人とそういうことをすると、あるんだけど、自分のその、生き方っていうんでしょうか、そこまで言ったらオーバーですけども、ここまでだったらいいだろう、という感じになってしまう。だからそれが拡大解釈されると、さっきみたいなことになるんですよ。生で…(生でやるのは自分で決めたことだから…) その、ほんとうの、ゲイであって、セーファーセックスにはどんな物があるか、っていうと、極論的にはテレフォンセックスしかなくなっちゃう。そうするとその中で、どこまでのリスクを背負えるか?っていうことをこの歳になると、そういう考え方になってしまう。だから、いかにしてHIVが感染するかってのは十二分に知ってるんですよ。でもセックスはコミュニケーションであり人生のうちで大切な物であるのだから、その中でコレまでは…もしなっちゃったらしょうがない…っていう言い方は変だけれども。もちろんゴムしてしかしてないですけども…その分に関しては自分でコントロールしよう、と僕は思っています。だからその辺りを…難しと思うんですよ。若い人にそれをコントロールができるか、っていうと難しいのかな?と。(東京、コミュニティ活動家)

#### 概念名7：性についてのQOLを下げる予防情報は集団として受け入れられない

定義：従来の性行動の大幅な改変を迫る予防情報によって、集団にそのことについてかたまりなくない空気(タブー)が形成される

リスクマネジメントというフレーズでちょっと思ったのですが、やって行く上で、感染しないっていうのは無い訳で、セックスする…行動する上でその先の方が一をその人が見越しているのかどうかで、セックスの中身も変わっていくのかな?と。結局、QOLを下げたまで予防防って言ったらみんな引いてしまう訳だし、行動の中で知識を正しくみんな持っているのだとすれば、その行動でその先起こりえることも覚悟というかして、それを

さらに受け止めるくらいの気持ちを個々の人達が持てばいいのかな?というようなところがあるのかな?(東京、コミュニティ活動家)

(学校で)とくにセクシャルマイノリティの話を「気持ち悪い」とはつきり書いてくるのも男子学生。授業も男子学生が減ってきているのもわかる。残るのは女子学生。男子学生にメッセージを届けるのはとても難しい。どうしても男性に自制を迫る内容になってしまう。避妊にしてもSTIにしても。だからそこが越えにくい壁。(中四国、コミュニティ活動家)

#### 概念名8：性に関するタブーを作ることへのタブー

定義：性行動に自制を要求する予防啓発の本質が、「性に制約を受けない」ゲイ・ライフスタイルのひとつの中核として相容れない。

HIVに関して、こういう事は危ないとか、カミングアウトをしたノンケの友達に対しては言い易いのだけれども、ゲイのコミュニティの中にいる時って 言わずに済ませてしまっている自分がいるような気がして…それってなんだろう? ゲイの方が、性に関してタブーを作るのを煙たがられそうな気がして、言いにくかったり言い出せなかったりします。(東京、コミュニティ活動家)

リスクについて、わかっててやってる人は少なからずいると僕は思います。正しい知識を把握した上でやっている人に関しては、やっぱりタブーではないですけども、こちらから言うのは野暮というか。ただほんとうにわかっているかどうかわからないですから、アレなんですけどね。(東京、コミュニティ活動家)

後はそう、エロ目的が無い媒体は受け入れられる。エロを期待される雑誌の場合それは萎えさせるコンテンツになっていけないって言う、話があったんだけど、逆にその上にリスクな行為ばかり振って、煽動するのも良くないんじゃないか。焚き付ける可能性もあるから、エロコンテンツがある雑誌だと、リスクな内容は行わない方がいいんじゃないの?というはなしは、一回議論になりました。(東京、ゲイ雑誌ライター)

#### 概念名9：楽しむ場でHIVを語ることのタブー

定義：楽しみにきている場所で病気のこと、とりわけHIVに関することは楽しい雰囲気を疎外するから、ゲイの集まる空間でHIVに関する内容はタブーになってい

る

必要性が無いですよ。エッチする時でも予防をちゃんとしている場合だったら言う必要も聞く必要も無いと思う。自分で宣伝する訳でもないのにね。タブーって言うよりも、言うべきでない事とでもいうのか。…むしろ話がこんがらがってくるカネとか政治の話とかの方が避けようかな？というのと同列のような気がする。(関西、コミュニティ活動家)

今日ちょっと呼ばれて思ったのは、バーの中でHIVのことってのははかなりタブーなのではないかと思いません。話はね。…というのは感染者の人がいるかもしれないと思って話さない人は多々いるだろうし、やっぱり楽しい話じゃないじゃないですか。で、リラックスして話を楽しみに来ているのに、なんでそんな話をしなきゃなんないの？と思う人は多い気がします。バーという場所は、店の規模にもよるのですけれども、クラブとかがはやっていたりすると、クラブ文化みたいなのを背負ってバーに来ている人は…うちの店はキャバが広いので…30代とかはそういう人が多いので、関心は持っているんだろうけれども会話にはならないですよ。HIVは。(東京、ゲイバーのマスター)

クラブではそもそも、面と向かってしゃべるというスタイルを取らないですよ。 「ワーお久しぶり」とか言って、踊って、お酒飲んで、下らない話をして帰るといった形なので、トピックが出て会話をする感じではない。だから例えばそういうお店とか、僕の友達は大学の時から付き合いでクラブに行ったり昼間も会っているという友達関係も多いですが、昼間話す内容をクラブで話すかっていうとしないですよ。(東京、ゲイ雑誌ライター)

**概念名10：あやふやな情報のまま正しい情報を確認できない**

**定義：**ゲイコミュニティの中で持っている知識を更新する機会がないために、あやふやな情報(先述の概念)が訂正できないでいる。

なんかちょっと、ゲイの中では情報が先走りしている感が。情報が正しい情報ではなくて背びれ尾びれがついて広がっているような感じがします。(Interviewer:パラフレーズ) 正しい知識を吸収しようとしている人にとっては、もちろん詳しい人もいますけれども、レベ

ルがあつ、低い人にとっては、ちょっと違ったイメージで伝わっているなどと思います。(東京、コミュニティ活動家)

いろんな活動をしていると、検査に行こう検査に行こうというけれど、検査が先走りしてしまっている。予防につながっていない、っていう。この前もエイズ予防月間、12月で、ありましたが、検査に行こうっていうのがまず前面に。ゲイの世界に浸かっている人の中には検査に行けばいいんだという風に捉える人もいますので、検査に行くことで安心する、その間には何もしない。アレ？って感じですね(東京、コミュニティ活動家)

ノンケの人とはともかくゲイの人達でHIVを知らない人はいないだろうし、一定レベルの知識ってのはあると思うんですけども。さっき話した勉強会の活動をしている中で、知識はあるんだけどもそれを使って人と情報交換をするという場は実はあんまりないな。飲み屋とかクラブとかかけっこうそういうことが多い。そういう中でHIVの話ってのはまず出ないですよ。予防啓発団体の中でバーのママにインタビューをたくさん取ったことがあるんですけども、その中では、お店の中ではそういう話、お客さんから相談されることはあるんだけどもお客さん同士ではどういう話をするとはまずないなあと。そういった中で情報が一人歩きしちゃっていて、〇〇(参加者)さんも話していましたが、あやふやな情報のままぼんやりとボールを持つてるから、それは正しい情報かどうかわからないけれども正しい予防につながっていないのかなってところがあって。HIVっていうそのものがまだ何となくタブー視しているというか、話すのに抵抗があるような題材になっている、そういうイメージがかけっこう強いんですね。HIV、病気悪いよねかかってしまったら大変だよっていうぼんやりとしたこれってどうなんだろう、これくらいだったら平気なのかな？としたぼんやりとした情報のままでもみんなそれを話す場がないから確認することも出来ないし、そうしたままの情報でセックスにいざ及ぶときにこれって大丈夫なのかな？まあいっか、で流されるかもしれないし。病気に対する意識…一歩引いた意識っていうのは、知識とか、正しい啓発、予防活動、…個々人の予防にはつながっていないのかな、という気がしています。あとそれも含めてそういった話をしない、経験をしていない人が、実際HIVになってしまったあとも、ちょっと心の問題というか、それをどうその人が捉えていけるかが

影を落とす部分ではないかなと思います。実際どうしていいかわからない 結果によっては自暴自棄な行動につながってしまうことにもなるかもしれないです。情報は届いているんだけど、その情報をみんながどう捉えているのかっていうのがまだうまく…。使ってほしい感じて使ってもらえてないのかなど。知識はあるが意識までは高まらない。(東京、コミュニティ活動家)

### 概念名 11 : セックスパートナーからの誘いを断れない

定義 : リスク行動の実践において、セックスの相手の主張や態度が大きな要因である。

僕は何人か知っているんですけども、やったことがある人、やっていた人、やっている人含めて。比較的「自分は大丈夫だ、捕まらない」も含めて、「そんなに大した中毒にはなっていないから大丈夫だ」って言う風にいつている人が多いですね。自覚症状が無いというか、あるというか。「自分は自覚しているのでこれくらいだから大丈夫だ。いつでも止められるし」という。…やめてないじゃん(笑)。もちろん過度にはまって非常に苦しんで逃れられないでいる人もいます。ほとんどそういう人は最初はセックスのパートナーからやってみないと言われて、初めて、そういう風になっちゃう。やっぱり、訳わかんなくなっちゃうって言うことだから、効くんですよ。(東京、ゲイバーのマスター)

ナマとか言ってる人はダメ。でもこの人とつながりたい、知り合いになりたいなと思ったときにその相手が生とか言ってる人はダメですよとかいってたら、どうしても、って言う人だったら流される人もいます、かも知れませんが。(東京、ゲイ雑誌ライター)

### 概念名 12 : ネットでのアンセーファーなセックスの書き込みを簡単にたどり着く

定義 : ネットでアンセーファーな行動への興味を追究すると、それに見合ったセックスの相手・場所・販売入手先などが過去と比較して格段に得易くなっている。

「〇〇〇」という SNS はすごい世界だなあと。完全ヤリ目的の SNS なんですけども、みんな日記に、やって、ハメ撮りをした写真を載っけて報告している。んで、そのためにセックスをしているような人が、けっこう多いんじゃないんじゃないかなと思うんです。例えば日記で

「今日はハメ撮りできませんでしたごめんなさい」とか書いてあって…。別にね、それ、したいんなら構わないんだけど、見せるためにやってるのかよお前! みたいな。後、見てて面白いなあと思ったのは、さっきもドラッグの話が出ましたけれども、「キメ生」コミュニティってのがありまして、〇〇(SNS)というみんなが入っているいちばん大きなコミュニティが13000人くらいいて、「キメ生」には400~500人いて。そこをみると今までキメる、ということは意識もしていなかったけれども「ここで手に入ります」みたいなことを言われれば、飛ぶとショッピングサイトに飛べる。すごい情報には近くなっちゃうているなあ、と。(東京、ゲイ雑誌ライター)

興味があるとそのままそこにダイレクトに行けちゃうので、興味の幅が広がってしまうかな、と。(東京、ゲイ雑誌ライター)

ナマでやろうとか、そういうものですね。そういうことが大々的に出回ったりするとそれまで興味の無かった子までやってみようとアクセスすることになる。(中四国、コミュニティ活動家)

### 概念名 13 : ネットによる作るのも簡単、捨てるのも簡単な関係性の作り方

定義 : 人間関係を簡単に作りたい、その一方で煩わしい人間関係は回避したい、という要求に、インターネットはよく応えているが、それによって性行動の機会が増える、相手とネゴシエーションを行うための個人のプロフィールが欠如するなどの予防阻害が起きている。

自分のことを隠しながら出来ますよね。べつにポンとコミュニティに入ったからと言って自分のことが判る訳じゃないですか。(Interviewer : ネットでは匿名であることは重要?) ある意味重要。(Interviewer : 匿名であることは阻害要因でもあるのでしょうか?) 昔あった文通欄の回送は絶対に自分の名前と住所を書かないと届かなかった。でも今は別に、サブアドレスとかメールアドレスはいくらでもとれるし、捨てることもできます。(東京、ゲイ雑誌ライター)

すごく簡単に人間関係が。作るのも簡単だけれども、捨てるのも簡単になった。そんなにディープに行かないけれども、広範囲に広がっていくけれども簡単に切っちゃう。……(ネットのハンドルネームのような自称をする客がバーで増えてきていることについて) きっとそれは

インターネットというアレがひろがって…本名で検索されると出て来る可能性が高い人が比較的いると。昔はそういうことなかったじゃないですか。狭くなったので、判らないようにしてて、都合のいい部分だけ広がって、出会いが広がってヤレれば、ということは広がっているんだけれども、こと個人情報となると極端に狭くなる、狭くしているって人は多い気がする。(東京、ゲイバーのマスター)

とくに携帯サイトの場合はいわゆるセックスネットワーク作り。コミュニケーションをとる必要がない。必要最小限の情報で足りる。その面で携帯のほうがゲイにとって使いやすいのではないかと。(中四国、コミュニティ活動家)

#### 概念名14：こっそりとセックスの相手を探す

定義：自己プロフィールは最小限に抑えることでセックスの相手をさがす。こちらもリスク行動の回数の増加、ネゴシエーションの省略が阻害要因である。

エロ系のだと、カウント・足跡機能とかあるじゃないですか。過激な画像を載っているとカウントが稼げるみたいな感じで…結構そういうのを意識して、毎日のように過去画像を…。過激画像をあげたほうが人気者になれるという構造があるので、ちょっとそれがすごい過剰だなど。(Interviewer：これは立派なグループ行動規範ですよ) 見ると、あ、こいつ、もしかして…と、本当の知り合いを見つけちゃったりするんですけども(一同くすくす笑い) 夜と昼とは別行動なのだな、と(東京、ゲイ雑誌ライター)

それはもう眠っている訳ですよ。結婚してたりして普通の顔して社内で、かなりいい会社で良い役職に就いたりして。ただ、コソコソとネットで知り合ったのとセックスやりまくったりするひとがけっこう多いらしいんですよ。で、そういうひとがやっぱりHIVになる。(東京、ゲイバーのマスター)

とくに携帯サイトの場合はいわゆるセックスネットワーク作り。コミュニケーションをとる必要がない。必要最小限の情報で足りる。その面で携帯のほうがゲイにとって使いやすいのではないかと。(中四国、コミュニティ活動家)

#### 概念名15：ゲイの友人は要らないが、セックスの相手は探している

定義：性行動の相手だけを求めてゲイ/MSMの場に接触しているために、予防情報に触れない、触れても拒否的、という阻害が起こる。

そういう人はインターネットはやる訳ですよ。インターネットでいろんな人と知り合ってセックスはやる。だけどその知り合う相手が既婚者だったり独身だったりする訳ですけども、要するにかなりクローゼットで友達を持たない、持ちたくないんですよ。徒党を組むのはイヤだし。気もちいりいセックスができればいいんですよ。……楽しいセックスができればいいんですよ彼らにとっては、ゲイの友達は要らないしノンケの友達がいっぱいいるし。そういう人、すごいいるんじゃないですか。(東京、ゲイバーのマスター)

#### 概念名16：楽しいセックスができればいい

定義：楽しいセックスができるのであれば、知識として理解している健康上社会生活上の不利益を顧みなくてもよい。

そういう人はインターネットはやる訳ですよ。インターネットでいろんな人と知り合ってセックスはやる。だけどその知り合う相手が既婚者だったり独身だったりする訳ですけども、要するにかなりクローゼットで友達を持たない、持ちたくないんですよ。徒党を組むのはイヤだし。気もちいりいセックスができればいいんですよ。……楽しいセックスができればいいんですよ彼らにとっては、ゲイの友達は要らないしノンケの友達がいっぱいいるし。そういう人、すごいいるんじゃないですか。(東京、ゲイバーのマスター)

(理論メモ) 概念、「ゲイの友人は要らないが」と同じ根拠発言引用もとである。この発言で説明されている人物像は異性愛者として一般社会に許容されている生活を維持しており、HIVに感染することでその生活が脅かされるリスクがあることは読み手には明確であり、実際に感染した人は治療上の困難を抱えているとの言及もある。それでもなお、「楽しいセックス」がそのリスクへの用心よりも優先されるという意味をもこの発言は解釈できると思われる。

## § 上位カテゴリー

筆者らは続いて、上にあげたリサーチクエスト「予防行動の阻害要因」の概念を上位カテゴリーにまとめる分析を行った。その結果、捉えられた上位カテゴリーは、「生活に埋め込まれていない「知識」、「予防情報を単純に考えたい」、「セックスがなによりも大事」、「コミュニティの中でのHIVへのタブー」、「気持ちのいいセックスを優先する」、「ネットによる作るのも簡単」、「捨てるのも簡単な関係性」、「社会生活と切り離れたセックス」である。

### 生活に埋め込まれていない「知識」

概念：ゲイ向け情報のマンネリ化

概念：知識からの「抜け道」を自己判断する

概念：あやふやな情報が先走りしている

これら3概念はどれもゲイ/MSMがもつ予防情報の陳腐化による新情報の受け入れ回避、不確かさ、誤解・曲解がある、という現象を捉えた概念である。

### 予防情報を単純に考えたい

概念：今のセックス行為を完全に変えることを迫る情報への拒否感

概念：初めて予防情報に接触する場合、そのまま受容・行動化する

概念：予防知識とQOLをはかかってリスクを引き受けることの難しさ

性生活の経験が増すにしたがい、予防行動とは性生活の行動変容を要求するものであり、単純に絶対安全・絶対危険と言うことのできないグラデーションのリスクの中で自己の行動を自己の責任で決めるものである事実と直面する。そうした複雑で思い思考と自己決定を回避し、単純に考えたいという気持ちが、若さ、性生活と他生活との統合の度合い、現在の性生活を犠牲にする度合いを要因に働く、と3つの概念からこの上位カテゴリーは解釈される。

### セックスがなによりも大事

概念：性についてのQOLを下げる予防情報は集団として受け入れられない

概念：性に関するタブーを作ることへのタブー

下位概念は一方は犠牲を強いる予防情報に拒否感がある、他方は性を全面的に肯定しようとするゲイの気風と

予防情報との不整合を指しているが、どちらもセックスがとても重要な意味を持っているという集団的な空気を指している。

### コミュニティの中でのHIVへのタブー

概念：楽しむ場でHIVを語ることのタブー

概念：あやふやな情報のまま正しい情報を確認できない

下位概念はいずれもゲイ/MSMの集う空間で、HIVと予防情報について指しており、一方は楽しみに来ているのだからそういう場では語りにくい理由を、他方では「語らないことで予防情報が更新訂正されない」結果を説明している。

### 気持ちのいいセックスを優先する

概念：セックスパートナーからの誘いを断れない

概念：ネットでのアンセーフなセックスの書き込みに簡単にたどり着く

先述の上位カテゴリー「セックスが何よりも大事」と似ているが、先述のものが気風や集団心理のようなものを指しているのに対し、こちらのカテゴリーは個人、一人ないし少数の複数（セックスパートナー）との対人的な空間において、気持ちのいいセックスを優先して選択する、という上位カテゴリーである。

### ネットによる作るのも簡単、捨てるのも簡単な関係性

概念：ネットによる作るのも簡単、捨てるのも簡単な関係性の作り方

セックスを含めたゲイ/MSM生活全般において、気軽に人と繋がりたい、そして煩わしい人間関係は回避したいというニーズに、ネットという媒体はもともとよく応えている。その結果として、個人プロフィールの省略、コミュニケーションの浅薄化、予防情報の欠落などが起きている。

### 社会生活と切り離れたセックス

概念：こっそりとセックスの相手を探す

概念：ゲイの友人は要らないが、セックスの相手は探している

概念：楽しいセックスができればいい

とりわけ後半2つの概念は「ゲイ」というものを意識しながら反目する人について言及しているが、名前やプ

ロフィールを隠して、異性愛社会の中で許容されている自己の社会生活を守りながらセックスの相手を捜す一方で、その社会生活を守るために必要であるはずの「予防」は「楽しいセックスができれば」に優先されてしまう、という矛盾した行動様式にまとめることができる。

#### D. 考察

本研究では、調査手続きの項で述べたように、ゲイ/MSMの商業施設や当事者組織・当事者支援組織で活動してきた参加者から見たゲイ/MSM人口の、予防知識の吸収や予防行動の実践を妨げる要素は何かを聴取、分析を行った。

本研究のリサーチクエスション（予防阻害要因）については、例えばメンタルヘルスの要因、異性愛社会の中でゲイ雑誌などへのアクセスがしにくいなどの幅広い要因が語られたが、今回の分析では特にゲイ/MSM個人が予防情報を受け取れない/受け取らない事情、および性行動の場面でセーファー行動を取らない事情といったより直接的な阻害要因に焦点を当てて概念の抽出を行った。

抽出の結果16個の概念が抽出され、筆者らはそれらから7つの上位カテゴリーを範疇化した。

ゲイ/MSMの中で予防を阻害する瞬間、あるいは予防を阻害されている個人の属性として今回の分析で上げられた概念・カテゴリー群の比較的多くに通じたカテゴリーに、「その時その場のセックスをもっとも大切なものとする」と考えるがある。この考えは個人の行動規範の場合もあり（例：今のセックス行為を完全に変えることを迫る情報への拒否感）、ゲイ/MSMの集まる場所での空気でもあり（例：性についてのQOLを下げる予防情報は集団として受け入れられない）、さらにその時その場のセックスをもっとも大切と考える立場から、作るのも捨てるのも簡単な人間関係スタイルの需要をネットという新しいコミュニケーション媒体が満たしている。

同じセックスを重要視する文脈のある概念の中では、「性に関するタブーを作ることへのタブー」がやや他とは異色のものを含んでいるかもしれない。というのは、この「性に関するタブーを作ることへのタブー」は過去あるいは現在の異性愛中心社会の中で否定と抑圧の標的であった同性愛両性愛指向にまつわる性のありよう全体を肯定的に受容し積極的に実践しようとする、いわば文

化的意味での「ゲイ」という気風とも解釈され、それ以外の「セックスを最優先」にみられる性生活とその他の社会生活との乖離とは逆の、統合的なニュアンスをも含んでいるからである。性に肯定的なゲイの文化的特徴が個人にどう理解され予防にどのように影響するのかにはかなりばらつきがあるかもしれない。

具体的には、ゲイバー、ゲイ向けのインターネットサイト、サークル、ゲイ向け予防啓発プログラムという「場」の中で、これまで比較的流通してきたゲイ/MSM向けの予防情報に触れてきたのだけれど、それらの情報に対峙する「場」の利用者の態度も一様ではないことが、本研究のリサーチクエスションから抽出された概念の多様性から示唆される。ある人は（かつては積極的に受け入れることができた）ゲイ向けの予防情報に飽和をおこしており（ゲイ向け予防情報のマンネリ化）、ある人は予防への知識や理解を深めてゆくほどに自己決定の難しさに直面させられる（予防知識とQOLをはかってリスクを引き受けることの難しさ）状況が予防阻害となり、また一方で別の人は、ゲイという生き方に反感を持ったり（ゲイの友人は要らないが、セックスの相手は探している）、またある人は「場」の外で営んでいる異性愛社会に順応した生活を守りたい動機付けから「楽しいセックスができれば良い」という行動をとったりしている。ゲイというものに親和性の高い人と低い人とでそれぞれ予防が阻害される理由が異なっていることが示唆された。

また興味深いのは、こうした「ゲイ」という生き方や社会生活に反目する人であっても、ゲイの「場」を利用するのであり、また「極端に避ける人はやっぱり関心があるからなんだと思うんですよ。ネット掲示板でリブたたきをする人っている訳でしょ？そういうひとはリブにどこか関心があるからわざわざ書き込みをする訳ですよ。（東京、ゲイバーのマスター）に言い表すことができるように、ゲイを避けるMSMもゲイという動きを意識して行動を決定していることが示唆される。ゲイ向けの予防情報、予防活動は公汎なMSM人口群に届いてきていると思われる一方で、それらの情報はそれぞれの立場から様々な意味をもって理解されていると思われる。

今回の研究アプローチは少数複数から得られたデータを質的に分析したものである。また、本研究のインタビュー参加者は、ゲイコミュニティを訪れる様々な人達を観察している立場、そして参加者自身のゲイコミュニ

ティへの参与と経験が長い立場から発言しているので、リサーチクエスチョンへの答えの主語かときに自分であったり、またときにはユーザーであったり伝聞の情報であったりする。

本研究の手法と参加者の特性から、社会科学には標本抽出がもっともしにくい人口集団の、数量化の難しい情報を探索的に抽出することができたと考えられる。今後の研究では、よりふさわしい標本から同様のリサーチクエスチョンを抽出すること、例えば過去にゲイ向けの予防情報に何らかの形で疎くて、予防行動実践が阻害されていた人からレトロスペクティブに予防阻害要因をインタビューする、という手法であれば、「伝聞」の不確かさを回避することができる。

また、今回抽出された結果から、予防情報の伝達や実践を阻害する要因の量的研究を将来行う際の仮説を組み立てていくことも近々の課題である。

## E. 結語

MSMの中には予防情報入手・更新や予防知識の実践を阻害されている集団や、阻害されてしまう瞬間が様々な存在していると言えるが、そのように阻害される背景にはゲイという概念やコミュニティの特性、個人個人のゲイ向け予防情報との関わりの長さや親しみ、それに対する態度、ゲイ生活で利用する媒体の特性によって幅広くしかも全てのMSMに一貫共通しては作用しない阻害要因が語られた。

今回観察者の視点も含まれた標本から得られた質的データをもとに、より当事者性の強い標本抽出による量的な研究を行うことで今回あがった予防介入阻害要因を明確化させていくことが次の研究の段階となる。

## F. 参考文献

- 木下康仁、『ライブ講義M-GTA 実践的質的研究法』、弘文堂、2007年
- S. ヴォーン、J. S. シューム、J. シナグブ、井下 理監訳、『グループ・インタビューの技法』、慶應大学出版会、1999年

# ゲイ/MSM人口のサブポピュレーションの探索

宮島 謙介

長谷川 博史

研究協力者：大木 幸子

## 研究要旨

関東、京阪神、および中四国を活動地域とするゲイ/MSMコミュニティ活動家、ゲイ産業従事者を対象に、彼らが提供している場を利用するゲイ/MSMの、これまでの予防情報が届きにくかったゲイ/MSMの中のサブポピュレーションについての聴取および分析を行った。東京でコミュニティ活動家およびゲイ産業従事者を対象としたフォーカス・グループ・インタビュー(FGI)をそれぞれ1回ずつ、中国地方で中四国拠点のコミュニティ活動家とゲイ産業従事者を対象としたFGIを1回行い、それらインタビュー逐語記録からゲイ/MSMの中のサブ人口を28項目抽出した。サブ人口は、ゲイの「場所」としてバーやネット等の媒体を重複させて利用している一方、同じ場にあってもその場を使う動機付けや他者、ゲイというものに対する態度の違いが様々に存在することが明らかになった。ここにおいてゲイ/MSMにおけるインターネットの急速な普及が行動特性の変化に強い影響を与えていることがうかがえ、そのコミュニケーションスタイルによって新たなサブグループを想定することが可能である。

抽出されたサブ人口をそのコミュニケーションスタイルから次のように分類した。

- 1、「場の文化」を重視するコミュニケーションスタイルを志向する人々
- 2、「新しいコミュニケーション」のスタイルを有する人々
- 3、「場の文化」を重視し「新しいコミュニケーションのスタイル」も取り入れている人々
- 4、その他コミュニケーションスタイルではくくれない人達

今後は、これらサブポピュレーション分類の精緻化と、予防との関係づけの研究が行われなければならない。

## A. 研究目的

MSMはもっとも研究がなされ、進んだ感染予防対策のさまざまな試みがなされてきており、一定の成果をおさめつつある一方で、引き続きHIV感染予防においてもっとも脆弱な人口集団であり続けており、現行の予防情報や検査等の保健サービスにアクセスできない介入困難群が存在していることはまた紛れもない事実であり、さらなるMSM層の予防介入困難要因の解析が必要である。

本研究では先述研究「予防阻害要因」と平行して、MSM層の中のさらに細分化したサブポピュレーションの活動空間と行動特性を質的に探索した。

## B. 研究方法

個別施策層研究の先事例研究を踏まえて、MSMの対象細分化(層別化)のためにゲイコミュニティで活動するゲイを対象とした3つのフォーカス・グループ・インタビュー(Focus Group Interview 以下、FGI)調査を行った。インタビューは平行研究「ゲイ/MSM

人口の予防阻害要因の探索」と同一のものである。なお、当研究は群馬大学医学部疫学研究倫理審査委員会の審議を経て、医学部長の承認の下に行われた。具体的な施行事実を以下に示す。

### 【FGI-1】

調査対象者：首都圏在住のゲイ産業従事者(ゲイを対象としたバー、ショップ、クラブ、ハッテン場(出会い系商業施設)、サウナ、出版社、ポータルサイトなどの商業施設及びサービス事業の経営者、従業員

実施日：平成21年1月25日。

参加者：5名。

### 【FGI-2】

調査対象者：地方都市におけるMSM対象のコミュニティ活動(HIV予防、クラブイベント、映画祭サークル等)の主催者

実施日：平成21年2月1日

参加者：5名。



### 【FGI-3】

調査対象者：首都圏のゲイコミュニティ活動（ボランティア団体、趣味サークル、交流団体、ゲイイベント）への参加者

実施日：平成20年12月27日。

参加者：6名。

それぞれのFGIの発言はボイスレコーダーで録音された後逐語記録としてテキストに書きおこされ、研究者らによって本研究のリサーチ・クエスチョンである「ゲイ/MSMのサブグループ」に沿って、その質問の回答となる発言を抽出し、それらをKJ法に則って類似の発言ごとに取りまとめた。取りまとめた発言群は修正版 Grounded Theory に従って研究者らの協議のもと、共通する「概念」に関する発言のとりまとめ、その概念の「定義」づけを行った。

### C. 研究結果

各FGIでおこされた逐語記録を、個人の特定の可能な箇所を省略して添付資料とする。手続きの例示として「分析シート」を表1に示す。

「ゲイ/MSMの中にはどのようなサブグループが存在するのか」について、3つのフォーカス・グループ・インタビューに共通して、ゲイバーの客とインターネットユーザーの様々な属性や行動動機について特に頻繁に取り上げられていたことが、KJ法による分析によって明らかになった。他にも様々なサブグループがあることが各々の立場から述べられた。

(バー客)

KJ法分析の結果、ゲイバー客、あるいはゲイバーという場には比較的古くから変わらずに存在する規範、動機付けといった文化があることを述べたものと、最近のゲイバーにおけるコミュニケーションパターンの特徴について述べたものとに大別された。

(ゲイバーという場の文化についての口述)

#### 1「バーで病気や肉体的な話題をすることをタブーにする人達」

知識はあるんだけどもそれを使って人と情報交換を

するという場は実はあんまりないな。飲み屋とかクラブとかけっこうそういうことが多い。そういう中でHIVの話ってのはまず出ないですよ。…(中略)…。HIVっていうそのものがまだ何となくタブー視しているとか、話すのに抵抗があるような題材になっている、そういうイメージがけっこう強いですね。(コミュニティ活動家)

バーの中でHIVのことってのはかなりタブーなのではないかと思います。話はね、…というのは感染者の人がいるかもしれないと思って話さない人は多々いるだろうし、やっぱり楽しい話じゃないじゃないですか。で、リラックスして話を楽しみに来ているのに、なんでそんな話をしなきゃなんないの?と思う人は多い気がします。(東京、ゲイバーのマスター)

肉体的なことは、やっぱり言わなかったですよ、肥つてるとか痩せてるとか、今日顔色悪いわね、とか。たとえ顔色悪くても…(東京、ゲイバーのマスター) やっぱりHIVとかも含めて、何か、急激に痩せて来たりとか。いちばん念頭にあるのは健康のことです。モテるモテないではなく(同一発言者)

グループで来ると個人的な話ができないのでプライベートで悩んでることが出てこない。一人だと相談事などが出てくる。私も口外しないので。(中四国、ゲイバーのマスター)

昔なら政治・宗教・国籍だった。韓国北朝鮮差別などがあつたから。僕たちはそう教わつた。今は病気の問題があつて、病気のこととかを他人に言うのはベケ。(中四国、コミュニティ活動家) 1対1で相談されて話すのはいいけれど、第三者を含めて「あの人はそうだよ」というのは絶対にタブー。(同一発言者)

基本的に病気の話はどの病気も。とくに精神疾患とHIVの問題はとくにタブー。内臓疾患などはけっこう喋れる。潰瘍になつたとかガンとか。(中四国、コミュニティ活動家)

#### 2「精神科領域の話題は話ができる人達」

若い子に最近よく教えられたり怒られたりするんだけど、参加者Bさんこういう言い方をあのお客さんにするでしょ。その人うつだから、うつの人場合はこういうこと言っちゃいけないとか。ま、僕もうつだし、先生からもそういう風に聞いているので、そういう言い方は絶対にタブーですよ」みたいなことを教えられたりし

ますよ。(東京、ゲイバーのマスター)

精神的なことは聞きます。心療内科の先生から直接「こんな患者さんがいるので行ってもいいですか」とフックスが来たりとか。(中四国、ゲイバーのマスター)

### 3 「バーでは個人的なことは聞かない人達」

20年から30年前のバーもそうでしたよね。社章が見えているとママが「だめよ、ウラにして」(笑)。もう確実に本名はいわない。(中略) 僕がやっていた15年とか10年くらい前になると、逆に本名が出てた時代。(中略) 逆に今は昔に戻っているというか、人がまた増えている分クローズしている人が増えているってことですね、びっくりしちゃうなあ、それは。(東京、ゲイバーのマスター)

ゲイバーなので個人的なことはシークレット。本人が言わない限り。(中四国、ゲイバーのマスター)

(同席のゲイバーマスターをさして) 彼はどっちかと言えど干渉しないタイプ。昔からそう。あまりぼんと入っていかない。入ったら自分が潰されるから。悪い意味じゃなくて。だからある程度の間隔をもって中に入らないようにしている。私は口に出さないと気が済まないタイプだから。(中四国、コミュニティ活動家)

### 4 「バーでの会話を楽しみに来る人達」

(辛口のおしゃべりについて、ゲイバーの従業員は) 言う人はそんなこと気をつけて、なんて言ってもらえないんじゃないですか？それで嫌だったら来なくていいよ、というスタンスだと思います。むしろ僕なんか素人から始まったし今でも半分素人だと思っているので、たぶん昔の…だったら、やばいやばいって思うタイプだけれども。辛口とかできないタイプなので。だけど、たぶん7割くらいはママとかは…(東京、ゲイバーのマスター)

(上の発言に続き) 小さい店のところは、それを売りにしないと他との差別化ができないから、やっぱりしゃべれるママは、しゃべって叩きつぶすんじゃないのかなやっぱり、それを売りにするんじゃないのかな。(東京、ゲイバーのマスター)

あとは最低限、愛情があつての辛口なら。僕も比較的、こいつは、というやつにはバンバン言ってるらしいですね。(東京、ゲイバーのマスター)

### 5 「ハンドルネームを使う人達」

少なくとも僕が飲みにいっていた10年15年くらい前

よりは、今の方が、名前をどう呼ぼうか？と聞いても、ほんとうにハンドルネームのようなことしかいわないお客が多いような気がする。(東京、ゲイバーのマスター)

(最近のゲイバーにおけるコミュニケーションパターンについての口述)

### 6 「バーに必ず複数で来るか、一人で来る人達」

バーに来店するきかたが固定している。均質な仲間によるグループの交流の場として、バーが利用されている。

一人で来て黙って人の話を聞いて帰る人もいれば、常に誰かとの会話を楽しみたいと思う人もいるし。ただ、必ず一人はいつも一人だし、必ず複数で来る人は複数で来ますね(笑)。(東京、ゲイバーのマスター)

メンバーに共通性があると思う。(中四国、ゲイバーのマスター)

(上記を受けて) でも似た者同士な気がする。自分たちの年代からはどのグループも同じに見える。(中四国、コミュニティ活動家)

### 7 「バーにゲイ雑誌を読みに来る人達」

店に来て読むのがほとんど。買っているという話はほとんど聞かない。(中四国、ゲイバーのマスター)

### 8 「カラオケで、他の客や店子[ミセコ]と喋らない人達」

カラオケもかなり迷惑。歌い出されちゃうとアウト。歌う人は歌ってる、歌わない人は無関心。分かれてしまう。……カラオケがない時代には店子はしゃべってナンゴと言われた。だからカラオケ本とマイクが出てくると「アンタ手抜き」って思う。その前にしゃべりな、と思う。(中四国、コミュニティ活動家)

### 9 「バーの中でグループ間の交流をしない人達」

今は本当にグループ、2つグループがあつたら背中を向けている。混ざるといことがすごく少なくなっている。片方がハイに盛り上がっているともう片方がチラ見していることが多い。前だったらお店の人が話を振ったりしていたけれど、今はついてきてくれない。だから2つの班があつて一緒の話題にしようとするのが難しい。たとえば僕がここで話をしている。隣の人は携帯で自分の世界に入っている。話を振っても「は？」という感じ。同じグループなのに。1対1でしか話ができない。グ

グループに話を振ってもまとまらない。グループを作っても我が世界にいる。若い世代、20歳前後の世代はとくにそう。(中四国、コミュニティ活動家)

(上記を受けて) 思いますね。グループの中にグループがあったり細分化している。グループ間を移動する人も少ない。(中四国、ゲイバーのマスター)

#### ・10「店で相手を捜し、相手が見つかりと来なくなる人達」

…好きじゃないんですよ。基本的に自分の店でできるってのは、ありがたいんですけども、冗談半分と言えば、お客同士出来ちゃうとお店に来なくなるから(笑)。それは、自分もそうなんですけれども、彼の店でできたんですけども、家飲みとかが多くなったりする。他の人とコミュニケーションするよりは二人でコミュニケーションしたい時間が増えて来るから、飲みにかなくなることは判っているし、なおかつそこでいざこざなんか起きたりすると、会いたくないものだから、当然彼の行くところには行きたくなくなる。下手するとか他方だけ、いやふたりとも来なくなる。(東京、ゲイバーのマスター)

(「場の文化」と「最近のコミュニケーション」の中間に位置するゲイバー客の属性・行動様式として、以下が分析・抽出された：)

#### 11「店子[ミセコ]と一対一だとタブーの話題を話す人達」

個人的には、店をやっているときには、相談、ないしは、告知されることはありましたけれども、通常営業で他にお客さんがいらっしゃるときには、比較的禁句というか、あまりそういうことにはならなかったかなとおもいます。二人きりになると異様に言われる、ということは非常に多かったです。(東京、ゲイバーのマスター)

なんかね、深夜遅くなって、人が少なくなって来ると、やっぱり。電話なんかもそうですけども、ましてお酒なんか入ると、そういう気持ちになって来るのでしょう。親密な感じになっていって…。……他にお客がいると言わないですね。ただ、中のマスターってなると、別みたいで。これは私個人でなくても、他のお店のマスターも…(東京、ゲイバーのマスター)

(インターネット(携帯含む)ユーザー)  
今回のフォーカズド・グループ・インタビューにおいて、

ネット内での活動を主な活動媒体とする参加者はいなかったが、インターネットユーザー、還元すれば、インターネットを他のゲイ/MSMとしての生活場面に活用する人達、の様子が数多く語られた、我々は参加者のそれらの発言は以下の方に範疇化した。

#### 12「自己顕示欲求をネットで満たす人達」

(ゲイの尋ね人ネット掲示板の話題) それは銭湯だったりハッテン場だったり、地下鉄の駅だったり、っていうのが何秒おきにアップされる訳ですよ。それをみんな…目と目が合ったりするじゃないですか。で、自分も(その掲示板に目が合った相手への呼びかけ) 書こうと思いつつも、まずは自分のことが書かれていないか探しちゃう。……「今日ジムに行ったんだけど、今日ジムにいた人で僕のこと見ていた人はいないかな?」と思って探したら…いた!とか」ね(笑)。友達が指摘することもすごくあるんですよ。「これ、お前だよ」とかねえ。ほんとうによくその会話は出て来るので。かなり高いんじゃないのかな?「掲示板Q」。(東京、ゲイバーのマスター)

(ブログやソーシャル・ネットワーキング・サイトの日記機能で)自分の最近やったことを細かく…あ、そう、みたいな(笑)…(インタビュアー：日記を書きたい、見せたい?)というのもあるし、イベントの宣伝はみんな良くやっていますよね。(東京、ゲイ雑誌ライター)

みんな日記に、やって、ハメ撮りをした写真を載つけて報告している。んで、そのためにセックスをしているような人が、けっこう多いんじゃないかなと思うんです。例えば日記で「今日はハメ撮りできませんでしたごめんなさい」とか書いてあって…。別にね、それ、したいんなら構わないんだけど、見せるためにやってるのかよお前!みたいな。(東京、ゲイ雑誌ライター)

エロ系のだと、カウント・足跡機能とかあるじゃないですか。過激な画像を載付けてるとカウントが稼げるみたいな感じで…結構そういうのを意識して、毎日のように過去画像を…。過激画像をあげたほうが人気者になれるという構造があるので、ちょっとそれがすごい過剰だな。見てると、あ、こいつ、もしかして…と、本当の知り合いを見つけちゃったりするんですけども、夜と昼とは別行動なのだな、と。(東京、ゲイバーのマスター)

### 13 「ヤリ（性行為）目的でネットを利用する人達」

ヤリ専門のSNSもありますよ。(東京、ゲイ雑誌ライター)

「キメ生」コミュニティってのがありまして、SNS-Wというみんなが入っているいちばん大きなコミュニティが13000人くらいいて、「キメ生」には400~500人いて。そこをみると今までキメる、ということは意識もしていなかったけれども「ここで手に入ります」みたいなことを言われれば、飛ぶとショッピングサイトに飛べる。すごい情報には近くなっちゃっているなあ、と。

(東京、ゲイ雑誌ライター)

あるんです。「キメナマ」っていう、自分はナマ派です、という。そもそもSNSでセックスポジションを書くときに「ウケ・ナマ」とか「ウケ・セーフ」というのが選択の中にあるんですよ。そこで、自分はナマでいれている人ってけっこういて…、ナマ画像をちゃんと貼っているコミュニティというのが…あるんですよ。(東京、ゲイ雑誌ライター)

そのSNSみたいに、どんな人がいるのか、わからない訳でしょ？きっと。そうするとさ、自分の友達とか自分がいいなと思っている人がそこに入っているか選別できない訳ですよ。そのSNSの場合は比較的わかり易いので、ええっ？この人ったらこんなコミュニティに入っているの？ちょっとパスっていう…別に性的なものでなくてもね、そういう選別があったりしますよ僕は。例えばこの人と出会いたいな、すぐくタイプタイプと思っているけれどもその人の入っているコミュニティを見ると「ええっ？これかよ？じゃあ」(一同、笑)…っていう選択肢はとれるけれども、エッチ系ってのは顔出しとか個人が特定できないじゃないですか。(東京、ゲイバーのマスター)

とくに携帯サイトの場合はいわゆるセックスネットワーク作り。コミュニケーションをとる必要がない。必要最小限の情報で足りる。その面で携帯のほうがゲイにとって使いやすいのではないか。(中四国、コミュニティ活動家)

### 14 「アンセーフな行動の呼びかけ情報に反応する人達」

(前述の「キメナマ」コミュニティに)そこをみると今までキメる、ということは意識もしていなかったけれども「ここで手に入ります」みたいなことを言われれば、

飛ぶとショッピングサイトに飛べる。すごい情報には近くなっちゃっているなあ、と。(東京、ゲイ雑誌ライター)

興味があるとそのままそこ(薬物販売サイト)にダイレクトに行けちゃうので、興味の幅が広がってしまうかな、と。(東京、ゲイ雑誌ライター)

ナマでやろうとか、そういうものですね。そういうことが大々的に出回ったりするとそれまで興味の無かった子までやってみようアクセスすることになる。(中四国、コミュニティ活動家)

### 15 「ネットを嫌がらせに使う人達」

ほんとうに嫌がらせで使っている人とかいますよ。(東京、ゲイ雑誌ライター)

嫌がらせもあれば宣伝もあるみたいで。うちはそうでもないんですけども、けっこう頻繁に載る店があるんですよ。ハッテン場とかあると、それを「ヤラセ」って…。自作自演。所謂2ちゃんでも、大体は叩かれるでしょ。その中で褒める文章があると「自作自演」とか書かれる。(東京、ゲイバーのマスター)

### 16 「ネット時代でも顔をあわせたコミュニケーションを求めてくる人達」

出会いとエロのために、画像なり、そういうものがインターネットで手に入れば、あとは、まんがと小説の為に1500円、1800円という金額を、払う人は少なくなりましたね。かつてあった手紙を出版社が仲介してやり取りする通信欄というのは、全ての雑誌でなくなったのかな？(東京、ゲイ雑誌ライター)

そこで淘汰されて、それでも飲みに行くのを大事にしているとか面白いと思っている人達が僕の店に来てくれていると思うのですけれども。ただ、携帯電話ってのは面白いもので、…(中略)…しゃべりながら飲みながら携帯を手持っているのが半分以上…7割くらい。飲みながら携帯を見て、話しながら携帯を見てるのが。(中略)電話もそうだしメールもそうだし。まあ、いいんですけども「何しに来てるの？」みたいな…気がしないでもない。(東京、ゲイバーのマスター)

極端に避ける人はやっぱり関心があるからなんだと思うんですよ。2ちゃんねるでリブたたきをする人っているわけでしょ？そういう人はリブにどこか関心があるからわざわざ書き込みをする訳ですよ。関心があるとかかわり合いがあったとか。そうでない人ははなから手を

出さないし論外という感じだし、手も出さないですよ  
(東京、ゲイバーのマスター)

#### 17 「情報の信頼性を確認してネットを利用する人達」

しかしネットの情報って、鵜呑みにすると恐い情報も多いし、見たくない情報も入って来る場合もある。ネットも使わない訳じゃないけれども、ちゃんと根拠のある物で口コミの情報だとかセンターYのマンスリーセミナーとかと整合性のあわない物は排除というか、入れないようにしています。(東京、コミュニティ活動家)

例えば2ちゃんねるなんてのを見ると、僕は気分が悪くなるので見ないようにしているんですけども…僕の場合はですよ…、やっぱり取捨選択はしていますね。(東京、コミュニティ活動家)

逆に言うと情報があふれて過ぎていて、イベントにしても昔はフライヤーだけだったりしましたが、今は知るきっかけが無いと、自分から能動的にネットでは探さないと、欲しい情報が出てこないと思います。自分から興味を持ってくれている人にとっては探し易いが、なんとなく漠然と探したい人にとっては、情報があふれすぎていて、知りたい情報を情報はむしろ探しにくいように思います。(関西、コミュニティ活動家)

地方とか行くと、ポータルUの同性愛のページを作っているかた、過去は編集者Uさん、今は編集者Vさん。やっぱり、あの辺の人達の知名度が高いですね。(東京、ゲイ雑誌ライター)

「まずその人なりき」というよりも、グーグルとかで検索をして、STD、HIV、ゲイとかって入れて、その人に行き着くっていう感じなんだろうな。その人に何かあったら相談するっていうのではなく、まずなんか自分に症状が出て来て、それで検索した結果その人物が出て来て、その人のバックボーンを読んでみたら、この人にだったら相談してみようかな？というひとが大半なんじゃないかな？僕らの中で人物がそんなにあがってこない、ということ、そんなに傑出した人物が今いるとは思えないですよ。(東京、ゲイ雑誌ライター)

#### 18 「秘密をより保持できるという理由で利用を好む人たち」

同じ理由から同じネットでもPCよりも携帯電話と使う傾向が強い。

自分のことを隠しながら出来ますよね。べつにボンと

コミュニティに入ったからと言って自分のことが判る訳じゃないですか。(インタビューr: ネットでは匿名であることは重要?) ある意味重要。(インタビュー: 匿名であることは阻害要因でもあるのでしょうか?) 昔あった文通欄の回送は絶対に自分の名前と住所を書かないと届かなかった。でも今は別に、サブアドレスとかメールアドレスはいくらでもとれるし、捨てることもできます。(東京、ゲイバーのマスター)

PCを必ずしも持てるわけではなので、恐らく個人で持てるのは携帯だろうと想像できる。学生の情報の取り方を見ていると携帯サイトしか見ていないと思わせることがある。使う時はPCを使うけれども主として使うのは携帯端末だと思う。親元にいれば自分のPCでなければ危険でしょ。アクセスするのは。(中四国、コミュニティ活動家)

必要最小限のことでいい。ましてや普通に家に帰ってPCということになると面倒。自分で持っている携帯で、仕事中でもできる、となることは想像がつく。(中四国、コミュニティ活動家)

直接聞いてはいないが、レポートなどを見ているとパソコンを使うのは最低限のようだと感じる。情報の件でいえば地方は人間が少ない、情報が少ないから都会に比べると少ない情報でも個人が特定される恐れがある。(中四国、コミュニティ活動家)

個人的にはネットが身近でなかった時は雑誌に頼らざるを得なかった。危険性があったから。ネットが身近になると雑誌を買わなくても済む。雑誌の情報はネットに載っている。また雑誌をネットで買えるので本屋で買わなくなった。雑誌を買ったよという話を周りで見聞きしなくなった。袋にバックされて立ち読みできなくなったから買ったと聞いたことはあるが。(中四国、コミュニティ活動家)

#### 19 「一般的な情報や交流を得易いのでネットを利用する人達」

イベント情報、イベントであるとか映画祭、パレード…、あと個人的に行くライブのイベント、ゲイのシンガーの方やブラスバンドの演奏会行きたいねというと思ったら一応それで確認できる、いちばん早いでしょう。以前は口コミ、お店に行って劇団の人が来てフライヤー置かせて下さいとか、チケット置かせて下さいって言って情報をもらうしかなかったのが、狭い情報だけだったんですよ。最近はSNSとかでコミュニティで掲示したりし

てくれてるんで。割引チケットは無いんですけども、日時場所がはっきり書いてあるので重宝しています。(関西、コミュニティ活動家)

昔はですね、雑誌を買う目的が、エロ目的よりは情報だったんですよ。ところが、その情報が遅い、雑だったのが多くなって来て、そういう理由で雑誌を買わなくなりましたね。ナイトイベントばかりがあって、演奏会であるとか、そういうのは載らないとか、小規模だと載らなくなったのでしょし、イベントする人が雑誌に連絡すれば載せるんだろうけれど、雑誌側が去年はやったけど今年はどうなの？とか探しに来ることはまずないような編集方針になったらしくって。それまでは雑誌を当てに過ごしていたんですけども、もう当てにならないよという印象になってきました。いちばんは、関西に住んでたら、ロコミが当てになるんだけれども、来年また同じイベントを探そうとすると、去年それを聞いた友達に会わないと今年の情報は得られないという不便がありますので、やっぱりネットかな…ということになりますね。僕がさっき言ったように能動的に知ろうと思うなら、ネットがいちばん便利ですね。(関西、コミュニティ活動家)

ネットを使って自分でモノ書いたり発表したりというのをやって、それを使って交流している人ってのが自分の周りでは一定数います。あと週一回集まりがらみの集まる場所があるので、そこで会話をして酒を飲んでと言った小ちゃいミーティング、友達サークルみたいになっている交流があります。知る限りではそこでセックスは無いようですね。本を出している核になっている人をハブにしてつながっている人間関係というのが一個あるので、その人の日記にコメントすることによって知り合い同士とかなるとか、そういう風なつながりが生まれています。(東京、ゲイ雑誌ライター)

旅行先の情報収集とか、「今度どこそこに行くんだけど、友達紹介してくれ、いい店あったら紹介してくれ」行き先は国内国外問わずですけども。日記でつながっている人に求めたり、あるいはそういうコミュニティに入って質問したりとか、そういうのってあると思います。(東京、ゲイ雑誌ライター)

雑誌の広告と言えば、原稿つくってデザインして、出版される2ヶ月前くらいに中身が固まってしまう。ところが今は、お店もいろんなイベント、あるじゃないですか。自分のお店のホームページとかマスターのブログとかあれば、もうそこで「来週こんなイベントしますよ」

といえば、常連さんとか興味のある人はすぐにみる。それにマスター本人が管理できるから。…(中略)…プロバイダーもサーバーによっては無料で、有料としても数千円で…雑誌でウン万円払って広告を出す意味がなくなってしまう。(東京、ゲイ雑誌ライター)

## 20「地方ゲイは少ないのでネットの中でも特定される、と感じる人達」

あるサイトでは携帯の機種名が表示される。それにプロフなどが出ると「あの人かな」と思い当たってしまう。だから極力載せる時にはバレたくない心理が働くのでは…時々プロフをコロッと変えたりする子がいるが、書き込みの内容で「その子だろうな」と想像がつく。絶対数が少ないから。(中四国、コミュニティ活動家)

(上記を受けて) ゲイの絶対数が少ないので、いちど出てしまうと一気に拡がってしまう。(中四国、コミュニティ活動家)

(雑誌読者)

## 21「雑誌を読まなくなった人達」

とりわけ出会いとエロスへの需要が小さくなっている。

雑誌は読まれなくなりましたね。……出会いとエロのために、画像なり、そういうものがインターネットで手に入れば、あとは、まんがと小説の為に1500円、1800円という金額を、払う人は少なくなりましたね。かつてあった手紙を出版社が仲介してやり取りする通信欄というのは、全ての雑誌でなくなったのかな？(東京、ゲイ雑誌ライター)

(発言者が担当したゲイ雑誌は) 執筆陣が教授とか研究者みたいなひとが多かったので、わりと研究目的で学生さんが読んでいたりとか。権利に関すること、病気に関すること、文化に関すること、お金に関すること毎回テーマを変えて特集を組んでいました。(東京、ゲイ雑誌ライター)

捨てるのがめんどくさいっていうか。なんかこう…雑誌を捨てるのって別になるじゃないですか。そうすると「あんな本」みたいのが(笑)。モロじゃないですか。これ捨てるの大変だろうな～、そっちのめんどくささが。(東京、ゲイバーのマスター)

あと写真やなにかがDVDみたいなのとタイアップしてるので、宣伝的写真が非常に多くなっててなんかこう、…わざわざ買わなくても別に情報としてはもうわかって

いるようなものがたくさん載っている、ということも、たぶん売れなくなったひとつの要因なのでしょうね。(東京、ゲイバーのマスター)

## 22 「雑誌の能動的に予防メッセージを入れることができる特徴に注目する人達」

病気の話、媒体の特集で取り上げたことがあって。(中略) それを求めていた読者からはいい反応があったと聞きます。で、別の媒体ですが、だいぶ前なのですが生とかリスクーセックスの特集があるゲイ雑誌がやったときに、この特集をこの雑誌で取り上げちゃいけないんじゃないの?? という議論を一回したことがあって。その辺がもしタブーがあるとしたらひとつリスクーセックスって言う話と、病気の話…媒体によってですよ。…後はそう、エロ目的が無い媒体は受け入れられる。エロを期待される雑誌の場合それは萎えさせるコンテンツになっていけないって言う、話があったんだけど、逆にその上にリスクーな行為ばかり振って、煽動するのも良くないんじゃないか。焚き付ける可能性もあるから、エロコンテンツがある雑誌だと、リスクーな内容は行わない方がいいんじゃないの? というのは、一回議論になりました。(東京、ゲイ雑誌ライター)

私の関わっている雑誌はもう13年、創刊以来HIVのページがずっとありますから。治療の現状とか、感染したひとの日常とか。ま、それは情報と…。(中略) だからその常にエロと現実のリスクの情報は、ひとつの本に載ってはいませんが、どこを読むかは読者のかた次第なので。例えば小説をまるで読まない、グラビアとコミックしか読まない人がいるように、HIVに関するページはまるで飛ばすと、いうのも。(東京、ゲイ雑誌ライター)

それが雑誌のいいところじゃないでしょうか? バーではお店の広さにもよりますが、その話をしても、聞きたくない人にも聞こえちゃう訳でしょう? でも雑誌の場合は一人で読むものですから、イヤなところは飛ばせばいい。そのへんは媒体が違うのでいっしょくたに語れるものではない。タブーってのが雑誌にはそもそも無いんじゃないですか? それはモロ出しはNGとか、法律的なタブーはありますが、雑誌なので「雑」なので、何が載っていても、どんなコンテンツが載っていてもよい訳で。(東京、ゲイ雑誌ライター)

(クラブの客)

## 23 「音を指向してクラブに行く人達」

言語でのコミュニケーションは少なめ

クラブではそもそも、面と向かってしゃべるというスタイルを取らないですよ。 「ワーお久しぶり」とか言って、踊って、お酒飲んで、下らない話をして帰るという形なので、トピックが出て会話をする感じではない。だから例えばそういうお店とか、僕の友達は大学の時から付き合いでクラブに行ったり昼間も会っているという友達関係も多いですが、昼間話の内容をクラブで話さかっというとしません。(東京、ゲイ雑誌ライター)

クラブ好きな人ってのは、別にゲイのやつだから行くとて訳じゃないですよ。クラブ好きだから、好きな人が廻っているから行く、ていうことであって、ゲイであろうと無かろうとあんまり関係ないと思います。(東京、ゲイ雑誌ライター)

今は、音っていうものに対してものすごく… 「あの音がいいから」 っていうのが… お店でも話していますけれども、「あの音がいい」 っていうのは、僕はもうわからないのね。 だけど「あのDJ」が廻すあの音ってのがすごくいいんだよ。 …だからクスリとかが、わからないですけども、今のクラブの中でどのくらいドラッグが出回っているかはわからないですけど、少なくとも僕らが行ってた15年前20年前に比べると、もうそれは、ものすごい差があると思いますよ。クスリを使っているという。(東京、ゲイバーのマスター)

## 24 「出会いとセックスもクラブへ行く理由のひとつである人達」

さっき話した勉強会の活動をしている中で、知識はあるんだけどそれを使って人と情報交換をするという場は実はあんまりないな。 飲み屋とかクラブとかけっこうそういうことが多い。 そういう中でHIVの話ってのはまず出ないですよ。(東京、コミュニティ活動家)

それ(クラブでのゲイナイト)はありますよ、それはそれで。それは踊りにいくというよりも出会いにいく。 あわよくばヤッチやおう。 そういう理由であって。(東京、ゲイバーのマスター)

## 25 「サークル(ヤリ以外の)人達」

セックスの出会いとエロスを除外したゲイ/M SM同士の会合は拡大しており、インターネット媒

体の特性を生かして、地方へも広がっているという口述が得られた。

自分とは好みの全然違う人とあえるので違う世界が見る事が出来て勉強になりますね。パレードもそうですよね。普段の交流では熊ばかりしか来ないので、こんなデブばかり集まるんですけども、パレードでいろんな方、女の子や家族の方が一緒に歩いたりとか。(関西、コミュニティ活動家)

自分の周りだけを見ると、わりといますね。入っている、入っていた、複数のサークルを掛け持ちしている人が多いです。(東京、ゲイ雑誌ライター)

広がっていると思います。インターネットを通して、スポーツもそうですし、音楽系のサークルはものすごい数ある。後はあらゆる…お茶の会とかアニメ好きとか旅行好きとか、細かいところではマラソンとか。そういうのは例えばSNS-0のコミュニティとかそういうもので、誰か興味を持った人の入っているコミュニティを覗いてみることによってそこにどんどん入っていくという、そうやって広がっているの、増えているんじゃないですか？もう、ネットが無かった時代には想像できないくらい、きっと広がりはあると思います。だって、せいぜいお店に飲みについてそこでバレーボールのチームに入るとか、その程度だったでしょ。あとはね、雑誌を読んでいる人だけが、その雑誌を通じて何かの会に入るけれども地方に住んでいる人は参加できなかった、昔は。今はもうちょっと身近になってますよね。地方の人はネットをみてお店に来て、昨日この会合に参加したんだけど、っていう話はすごいあるので、すごく変わったと思います。(東京、ゲイバーのマスター)

雑誌側から見てもそうですね。特にその変化は都市部もそうですけれども、地方の方がより変化が大きいようです。地方都市ではバーが一件も無かったり、あっても1〜2件しか無かったりして、その街の中の人達の出会いも情報も少なかったのが、いまは、都会と地方の情報格差と言う点では埋まった、…”望めば”ですが。(東京、ゲイ雑誌ライター)

## 26 「ドラッグユーザー」

脱法ドラッグを未だに販売しているヤリ部屋もありますよね。それが本当に効くかどうかはわかりませんが、それが「タチサプリ」「ウケサプリ」がセットになって入場料いくらみたいな場所もありますし。そういうとこ

ろでそういうサプリを飲んで物足りなくなった人が本格的な方へ進んでしまう、という例もあって。よく聞く話で、どこそこのヤリ部屋の周りには警察が張り込んでるよ、とか。出て来ると職質受けるとか、ある日バツと踏み込まれて、そこにいた全員が尿検査でおしっこ取られたとか。そういうのは実際にありますし。知り合いのパートナーがほんとうに捕まったりもしていますし。(東京、ゲイ雑誌ライター)

やったことがある人、やっていた人、やっている人含めて。比較的「自分は大丈夫だ、捕まらない」も含めて、「そんなに大した中毒にはなっていないから大丈夫だ」って言う風にいつている人が多いですよ。自覚症状が無いというか、あるというか。「自分は自覚しているのでこれくらいだから大丈夫だ。いつでも止められるし」という。…やめてないじゃん(笑)。もちろん過度にはまって非常に苦しんで逃れられない人もいます。ほとんどそういう人は最初はセックスのパートナーからやってみないと言われて、初めて、そういう風になっちゃう。やっぱり、訳わかんなくなっちゃうって言うことだから、効くんですよ。(東京、ゲイバーのマスター)

マリファナなどは以前から違法だから「やりました」と言う人はまずいない。ゲイの間で流行ったゴメオ、ラッシュなどを経験したと言う子はけっこういる。(中四国、コミュニティ活動家)

## 27 「ゲイ嫌いのゲイ」

イヤだと思うことって、ゲイってゲイが嫌いな人が多いんですよ。それはちょっとイヤだなと思うことがあります。(東京、コミュニティ活動家)

男の人とセックスするとはっきりしたのは高校1年生の時で、…(中略)…その時点でもまだ僕自身がゲイだという…男の人しか愛さない、セックスしない、とは思ってなくて、男の人ともセックスする…バイセクシュアルなのか？という風に思い込んでいたという、思い込むようにしていて高校時代大学時代は女性とつき合ったりセックスしたりして。そうやって自分のセクシュアリティを受け入れるのを逃げてたってのもあったのですが、それがずっと続いて24、25のときにようやくはっきり自分がゲイです、と受け入れた、ってのが「自覚」になります(関西、コミュニティ活動家)



## 28 「クローゼット・ゲイ」

比較的ウチに来るお客さんで、でも、ゲイバーにはほとんど行かない。で、既婚者。ハッテン場にはものすごく行く。ゲイの友達を持たない。(中略) そういう人はインターネットはやる訳ですよ。インターネットでいろんな人と知り合ってセックスはやる。だけどその知り合う相手が既婚者だったり独身だったりする訳ですけども、要するにかなりクローゼットで友達を持たない、持ちたくないんですよ。徒党を組むのはイヤだし。気もちいいセックスができればいいですよ。ゲイとしてのプライドを持たないし持ちたくもないし。一生クローゼットの中で楽しく幸せに、だからゲイ・リベレーションのムーブメントとかおこると不愉快になるんですよ、彼。そういう人ってのはかなりいて実は。それはもう眠っている訳ですよ。結婚してたりして普通の顔して社内、かなりいい会社でいい役職に就いたりして。ただ、コンコンとネットで知り合ったのとセックスやりまくったりするひとがけっこう多いらしいですよ。で、そういう人がやっぱりHIVになる。けども、それを調べるだけじゃなく誰かに相談しようと思っても、その人がゲイの有名人とかだつたりすると、この人とつながってしまうとなんか自分の情報が漏れちゃうかもしれないから、つながないようにする。そうすると、あんまりゲイが行ってない病院を探す。で、当然そこで、「あなたは同性と性的接触をしましたか？」と聞かれても「したことありません」という、違う情報を答えて治療を受けようとする人もかなりいると聞いて僕はびっくりしたんですけども、現実にはあると思う。いつも思うんですけども、バーとかに出入りしている人間は本当にごく一部で、そうではなくて、まったく「ゲイ」という言葉すら口にしたこともなくて、だけれども男とだけセックスをして…という人のほうが…ゲイの中では8割とか占めるんじゃないですかね。そうすると問題はものすごく根深いし。それは止めることはもうできないかもしれないというくらい…。それは社会がそうさせている部分もありますけれども。けど、それになんか甘んじているというか、それでいいと思わせる風潮が日本にはありますよね。すごく差別されている訳じゃないし、普通に生活できる訳じゃないですか。何とか楽しく。楽しいセックスができればいいんですよ彼らにとっては。ゲイの友達は要らないしノンケの友達がいっぱいいるし。そういう人、すごいいるんじゃないですか。(東京、ゲイバーのマスター)

## D. 考察

本研究では、調査手続きの項で述べたように、ゲイ/MSMの商業施設や当事者組織・当事者支援組織で活動してきた参加者から見て、ゲイ/MSMの中にはどのようなサブポピュレーションが存在するのか(リサーチ・クエスチョン)を聴取、分析を行った。

バー、インターネットという場を主要な場所として、雑誌、クラブ、サークルという空間が抽出された。そもそもコミュニティ活動やバーや雑誌という、既に存在の明確な「場」から選ばれたFGI参加者の観察によるサブポピュレーションであるので、場所にちなむサブポピュレーションが抽出されるのは自明のことであったが、その「場」の中には単一的とは決して言えない、様々な行動様式や規範を持つサブポピュレーションが抽出されたことは新しい知見である。場の中でもとりわけインターネットは、一部のサブポピュレーションに「バー」という場の中で出会いの道具として活用されたり、出会いやセックスが主要目的ではないゲイ向けサークルという「場」が地方にまで広がっていったことに寄与したりと、他の主要な「場」との利用と重複していることが分析された。一方、雑誌はネットという出会いとセックス目的によりかなった媒体にシェアをとられている一方で、バーに雑誌が置かれていたり、出会いやエロスとは無関係、ときには拮抗する予防情報などをあえて併せて掲載できる特徴が評価されていたりと、一定の役割、現代的な役割を担っていることがわかった。

同じ「場」の中にもその場にやって来る動機付けや行動様式が異なるサブ人口が存在する具体例として、ゲイバーの客は、お酒やコミュニケーションを楽しみに来る人もいれば、ネットを併用して出会いの場としてバーを利用する人もいる。客同士でHIVの話題は話しにくい雰囲気がある一方で、店子と一対一でならば是非HIVに関する相談をその店子さんとしたい人達もいる。ゲイバーでありながらゲイのゲイ嫌いという人も来店する、といった具合である。サブ人口の中にも、別研究で抽出された予防行動の阻害要因と重複する特性、例えば匿名性(こっそりとセックスの相手を探すことと、秘密保持のメリットからネットを利用する人達と、ハンドルネームをバーで使う人達)、没コミュニケーション(あやふやな情報のまま正しい情報を確認できないことと、グループ間同士では会話が成り立たないバーの客と)、そして、

その時その場のセックスをもっとも大切なものとする（ヤリ目的でネットを利用する人達）といった事象と共通する要素が数多く観察される。

また、サブ人口の中には、阻害要因の中では抽出されなかった、出会いとエロ以外のサークルと言ったゲイ／MSMの場の広がりや、予防情報の信頼性を確認するために工夫をする人達といった予防からは中立的あるいは親和的なサブ人口や、「音を指向してクラブに通う人達」「自己顕示欲をネットで満たす人達」といった、予防情報入手阻害や予防行動阻害と近い位置にあるようにみえながら平行研究のリサーチ・クエスチョン（＝予防阻害要因は何か）で抽出された要素とうまく整合しないサブ人口も抽出された。

これらのサブ人口を概観するとき、ゲイ／MSMにおけるインターネットの急速な普及が行動特性の変化に強い影響を与え、コミュニケーションスタイルによって新たなサブグループの想定が可能であることがうかがえた。

そこで抽出されたサブ人口をそのコミュニケーションスタイルから次のように分類した。

- 1、「場の文化」を重視するコミュニケーションスタイルを志向する人々
- 2、「新しいコミュニケーション」のスタイルを有する人々
- 3、「場の文化」を重視し「新しいコミュニケーションのスタイル」も取り入れている人々
- 4、その他コミュニケーションスタイルでは括れない人達

1の人達は従来のゲイタウンを起点とする予防介入活動によって既に介入が可能となっており、MSMの中の介入困難層を抽出する上では2、3の新しい「コミュニケーションスタイルを持つ人達」をさらに詳細に分析することが必要と思われる。

## E. 結語

雑誌やバーからネットやサークルへという昨今の流れはある一方で、上記のゲイの集う場所や媒体を利用するMSM人口は重複している実態が示唆された。また、同じゲイの集まる場を共有するもの同士であっても、行動様式や意見・態度が様々であり、一方が他方を相容れていないという状況も起こっている。出会いとセックスの利便性から、ネット文化との連動から、個人が特定される懸念からなどの事情でゲイの集う空間の参加者の匿名

性も維持されている。そうした中でHIVに関する相談や情報開示は店子と一対一ならしたいけれども他のゲイ／MSMのいるところではできないという行動様式のサブ人口も特定された。

今後の研究デザインを変えた手法によりさらに今回あがったサブグループ、特にコミュニケーションスタイルに特徴を持つサブグループを明確化させ、実際のMSM向け、ひいてはその他の予防個別施策層の予防介入に還元されることが期待される。

## F. 参考文献

- 川喜田二郎 『発想法 - 創造性開発のために』 中公新書, 1967年
- 木下康仁 『ライブ講義M-GTA 実践的質的研究法』, 弘文堂, 2007年
- S. ヴォーン, J. S. シューム, J. シナグブ, 井下 理 監訳, 『グループ・インタビューの技法』, 慶應大学出版会, 1999年

表1 分析シートの一例

サブ人口概念：「バーで病気や肉体的な話題をすることをタブーにする人達」
定義：バーの中で相手や第三者の健康状態について言及することがタブーとなっており、その一環として、H I Vについての情報交換がなされない。とりわけH I Vにまつわることは他の健康状態に関する話題よりもタブー性が強い。
<b>variation</b>
<p>知識はあるんだけどもそれを使って人と情報交換をするという場は実はあんまりないな。飲み屋とかクラブとかけっこうそういうことが多い。そういう中でH I Vの話ってのはまず出ないですね。…（中略）…。H I Vっていうそのものがまだ何となくタブー視しているというか、話すのに抵抗があるような題材になっている、そういうイメージがけっこう強いですね。（コミュニティ活動家）</p> <p>バーの中でH I Vのことってのははかかなりタブーなのではないかと思います。話はね。…というのは感染者の人がいるかもしれないと思って話さない人は多々いるだろうし、やっぱり楽しい話じゃないじゃないですか。で、リラックスして話を楽しみに来ているのに、なんでそんな話をしなきゃなんないの？と思う人は多い気がします。（東京、ゲイバーのマスター）</p> <p>肉体的なことは、やっぱり言わなかったですよ、肥ってるとか痩せてるとか、今日顔色悪いわね、とか。たとえ顔色悪くても…（東京、ゲイバーのマスター）やっぱりH I Vとかも含めて、何か、急激に痩せて来たりとか。いちばん念頭にあるのは健康のことです。モテるモテないではなく（同一発言者）</p> <p>グループで来ると個人的な話ができないのでプライベートで悩んでることが出てこない。一人だと相談事などが出てくる。私も口外しないので。（中四国、ゲイバーのマスター）</p> <p>昔なら政治・宗教・国籍だった。韓国北朝鮮差別などがあったから。僕たちはそう教わった。今は病気の問題があって、病気のこととかを他人に言うのはベケ。（中四国、コミュニティ活動家）1対1で相談されて話すのはいいけれど、第三者を含めて「あの人はそうだよな」というのは絶対にタブー。（同一発言者）</p> <p>基本的に病気の話はどの病気も。とくに精神疾患とH I Vの問題はとくにタブー。内臓疾患などはけっこう喋れる。潰瘍になったとかガンとか。（中四国、コミュニティ活動家）</p>
<b>理論メモ</b>
<p>一対一だと話せる、話したい、しかしグループ空間では話せない、という観察が重複している発言もある。個人的なことは聞かない話さない、広い空間で人物が特定される心配を持っていること、嫌がらせにそれが使われたりする心配等とも関係がありそう。</p>

# 介入困難群への職域における介入プログラムの開発

高久 陽介  
長谷川 博史  
長野 耕介

## 研究要旨

個別施策層の中でも介入困難な層に対しては職域からの介入可能性が考えられる。ただしその際、直接的な働きかけより、H I V陽性者を含む、あらゆる個別施策層の存在を前提とした職場全体に対する間接介入が現実的と考えられる。そこでH I V陽性者の人権啓発と職域における予防介入を目指し、H I V陽性者が中心となって実施する共感型のプログラムを開発し、その試行を行った。

当プログラムは、1.エイズを知る、2.エイズを感じる、3.エイズを伝える、という三部構造の座学と参加型グループワークの複合プログラムとした。知識の提供を行うと同時にH I V陽性者の手記の読み聞かせにより、職域においては可視化が困難な介入困難層の存在への気づきと共感を促し、さらには情報発信者の立場に立つことによって、1, 2の部分で感じたことを言語化し、リアリティを確認するものとした。

プログラムの試行から陽性者の手記による現実認識とH I V陽性者への共感は参加者の問題認識を変え、参加者自身が抱え込んでいるMSMや女性、外国人などに対する偏見が軽減する上で効果があることがわかった。

## A. 研究目的

個別施策層のさまざまな保健行動の阻害要因となっているフェルト・スティグマの低減をはかりつつ、これまで予防施策が到達していなかった介入困難群へのアプローチを行う。職域におけるH I V感染予防啓発は、その中に存在するMSM、外国人、青少年など個別施策層をとらえる上で重要であるにもかかわらず、我が国において職域におけるアウトリーチは進んでいない。そこで、企業および労働組合に対しH I V陽性者の立場から提供できるプログラムの開発を目的とした研究を行った。

## B. 研究方法

すでに就労しているH I V陽性者の人権啓発と職域における予防介入を目指し、組合および企業に対してH I V陽性者の立場から提供する啓発プログラム「職場におけるH I V/エイズ・H I Vは誰にでも降る雨の一粒」の開発・試行を行った。

活動内容は以下の通り

- ・組合における介入可能な場面や協働の可能性の聞き取り。
- ・組合の各種研修時に実施可能な啓発プログラムのモジュール開発。
- ・組合の幹部に対してワークショップ形式のプログラム試行。

## C. 研究結果

### 【プログラム概要】

名称： 職域予防啓発プログラム

目的： 職場における人権教育および安全衛生教育の一環として、H I V感染症およびH I V陽性者に対する全般的理解の促進と予防意識の向上をめざす。

対象： 就労している一般成人（18歳以上の男女）

形態： 職域において実施可能な枠組（人数、時間、予算等）に応じて、スライドによるプレゼンテーション、講演、陽性者手記の読み聞かせ、グループワーク等の手法を組み合わせる。